

上下水道界のエッセイストが綴る

余話様々・虚無恬淡

第10回 不確かな言葉狩りの怖さ

亀田 泰武

1、はじめに

先日の鉢呂経産大臣の辞任騒動を見ていると世の中のむなしさを感じる。未曾有の震災で何をやるべきか、復興の手順が大幅に遅れ、国会本来の使命である制度化、事業実施などの活動をしていかなければならないのに、つまらないことで大騒ぎしてやめさせ、多額の経費がかかっている内閣や国会での活動の時間が無駄に使われた。

悲惨な市街地を見て死のまちと言ったのは表現の問題であって、事実を変えるものでなく、意図は充分読み取れるものであった。

辞任を見ていると、大きな問題となつている学校のいじめの場を見ているようである。特定のいじめやすい子に狙いをつけて、皆一緒に、あることないことではじめ

る。同じ政治家でも、問題となる発言をしたり、政治献金などもっとおかしいと思われる議員がメディアに追求されていない。

証拠として残っているのが、細川前厚生労働相が5月16日の参院

行政監視委で、同じような答弁をされたことで、この時国会では誰も指摘しなかったそうである。答

弁は国会議事録として保存され、インターネットで検索したら「人が一人も見えない、いない、牛が放牧をされて、主のいない牛が、何というか、漂っているといまますか、そんな風景を見まして、本当に町全体が死の町のような印象をまず受けました」とあった。

正式な記録も残らない現場での大臣コメントよりもずっと重い存在である。発言がおかしいと本当に認識されているのなら責任問題となるはずであるが。

2、騒動のはじまりと拡大

死のまち発言が大きくなったのは、読売新聞が、「原発事故やその後の対応で政府の責任が問われる中、担当閣僚自身が周辺地域を「死のまち」と表現したことは波紋を呼びそうだ」と報道したことがはじまりらしい。これに、野党や他のメディアが乗っかり、大きくなつてしまい、結局野田総理が不穏当な発言と言わされるように

なった。

世界末世のSF映画のごとく住民がいなくなってしまう、元に戻すことが早急にできそうもない悲惨な状況を死のまちと表現してどうして悪いのだろう。

報道側だけでなく、いろいろな政治家や著名人がとんでもない発言であるとメディアに出ていた。

インターネットに残っている報道

では、自民逢沢氏「経産相の神経を疑う。許すことはできない」、みんなの党・渡辺代表「言語道断その感覚を疑いたくなる」、自民・大島副総裁「大臣として失格に値する」など。

最近では竹中平蔵氏が日経ビズネス10月3日号の経済評論のまく



ヴォー・ル・ヴィコント パリ郊外

優れた財務長官であったニコラ・フーケが才能ある芸術家を発掘して17世紀に建設した庭園と城館。以後、ヴェルサイユなど欧州の宮殿の原型となった。お披露目の園遊会は大成功だったが、招待されたルイ14世のねたむところとなり、1ヶ月後にフーケはあらぬ罪で捕らわれ、再び城館に戻ることはなかった。しかし心血を注いだ名作により、栄誉ある名を歴史に残すことに。

らことばで「開いた口が塞がらない」多くの人がそう感じたろう」と書いていた。

この問題が大きかった頃、身の回りの何人の方に、この発言で大臣を辞任させられるのはおかしいのでは、と自分の意見を述べた上で、考えを聞いてみた。辞任する問題ではないという答えが主であったが、辞任に値するという答えも多かった。

3、懇談での発言

この「死のまち」発言に加え、報道陣に「放射能をつけちゃうぞ」とふざけて発言したとして非難されていた。死のまちは単に表現の問題であるのに、こちらは放射能を冗談に使っているもので、懇談の場での公式発言でないが、反感を感じる。

これについては、意見を聞いた方から次の情報をいただいた。経産大臣は「放射能」も「つけちゃうぞ」も言われていない(記憶がない)そうである。

また、懇談した記者たちは当然ICレコーダー等の証拠物を持つ

ているはずだが、それが出てこない。どうも、記者達のほうが「放射能」の冗談を言って、それを聞いていた鉢呂氏が否定しなかったからではないかというものである。発言が公式に残るものでないのに、騒いでも水掛け論になるだろうが、裏を返せば、根拠のほつきりしないことに大騒ぎして、大臣の辞任という重い結果をもたらしたことは大問題である。社会的な騒動を引き起こした者は、どこでも責任がかかってくるのが当然であるが、メディアの場合責任がはつきりせず、結局泣き寝入りになってしまう。こういう世の中では救われない。情報発信には発信者の記名を義務づけることが求められる。

また、数ある批判の発言が取材に誘導されたものである気がする。本当にそう考えていたのだろうか。このような常識で理解できない騒ぎは世界での報道に値しないし大体恥ずべきものである。

4、国政の空回り

国会は総理大臣の任命責任を追



庭園の運河 ヴォー・ル・ヴィコント

造園を一任されたアンドレ・ル・ノートルは後にヴェルサイユ宮殿庭園造営に指名されることになる。

求するなど、この大事な時に時間の浪費ばかりしている。6月24日にやっと成立した東日本大震災復興基本法は、復興財源、復興庁など主要なことが全部別の法律を作らなければいけない難しくない法案で、本来すぐ策定されなければ

ならないのにこんなに時間がかかったのには振り出しの議論が続いてきた。思い切ったことを考えると議案狩りにあうので、議論が一向に進まないであろうか。難しくないとされる復興庁設置の法案も出ていないようである。本当に必要なのであるか。頂上組織が増える

ると調整、連絡の期間は増えるし、その

分現場が振り回される。今の体制で実務に従事する現場体制を強化して、金を含めて大幅な権限委譲するの

も、地元的生活補償をしつかりして、当面誰も近づけない福島第一原発の回りに持っていくのが自然であるが、誰も言いだせない。

5、ゆすり発言

声明でも、公式発言でも、方向性を示すものでもない、単なる説明の表現でしかもはつきりしないことで大騒ぎして、国際関係を悪

化させるようなことが起きている。

これはケビン・ミア元米国日本部長が沖繩のゆすり、たかり発言をしたとされることである。我が国では、ひどい発言をしたと一方的に非難され騒がれたが、幸い本人の書いた本が日本で出版された。「決断できない日本」文春文庫。

誰が何を言ったというような問題は言葉が違ふとなかなか理解できにくい。日本語で執筆され、活字となった。これを読んでこの問題のあやしさが分かるようになった。

問題のブリーフィングを依頼してきたのはアメリカン大学であったが、この後ろにいたのが米国に留学していた日本人反基地活動家

であった。国務省ではレコーダーなどの持ち込みが禁止されていて証拠がない状況で学生がつくった発言録が騒動のもととなった。本人はまったくそんなことを言っていないと書いている。また翻訳の過程で、ひどい表現に変えることもできる。メモの原文は当然英語であり、これを訳したことになるが、原文メモはどうなっているのだろう。

ブリーフィングは海外に研修に行くツアアの学生達だったが、これを募集したのがその日本人反基地活動家で、学生の何人かは沖繩への行き帰りに問題の記事を発信していた。また学生のブログによれば沖繩の米軍基地で基地反対の横断幕を掲げていたという。そういういきさつなどを考えると、一方的な考えの人間によるつくりあげと考える方が妥当であろう。

報道は曖昧のうちに消えてしまいが、公的活動記録や出版物は残る。

沖縄県議会では報道がなされてすぐ3月8日に全員一致で「発言の撤回と謝罪を要求する」抗議決

議をしていて公表されている。

この人は割にはつきり物言う傾向があるようで、沖繩総領事時代に県議会が2回抗議決議をしているそうである。基地問題は複雑で現実にはいろいろなことがある。沖繩に対する国の基地関連の直接支出や基地を勘案したお金は複雑でよく分からないが数千億円のうちである。普天間基地が危険と言われているが、ヘリコプターが墜落した沖繩国際大学は基地の近くに後になって建設されていて、本当に危険と認識されていたならここに立地しなかつただろう。

6、参考にするべきこと

この本ではゆすり問題でなく、日本の基本的な問題を多数指摘している。

非常時の実務体制であるが、米国防務省タスクフォースが三交代のシフトで運営されたことである。日本の場合、自衛隊はやっているだろうが、行政の現場責任者の交代制は、詳細な災害対策マニュアルにも載っていないだろうし、議論にも登ったことがないのでない

か。実際に、責任者が朝から晩までこき使われていて、憔悴しきつている。これではちゃんとした仕事ができない。多忙な首長が呼び出され、待たされ、一言、二言発言を求められるのを見ていると、報道のつまに利用されていることがあわれに思える。

また、原発事故の一週間も後になって、自衛隊のたつた1〜2機の炉に届いたかどうかというような放水作業を見て、日本のような大国がこれしかできなかったのかと書かれているが、筆者も世界に放映されたこの映像を見て、ハイテク日本のイメージを一瞬にして大きく損ねたものと思った。本では、このほか日本の危機管理体制がどうしようもないことが書かれている。

7、偽メール事件

平成18年2月の衆議院予算委員会です。民主党の永田寿康議員が、「証券取引法違反で起訴されたライブドア元社長の堀江貴文被告が、社内電子メールで、自らの衆院選出馬に関して、武部勤自民党幹事長

の次男に対し、選挙コンサルタント費用として3千万円の振込みを指示した」などと指摘したのはじまりで、大騒動の末、永田議員の辞任、前原議員の民主党代表辞任に至った。この偽メールはある雑誌編集者が永田議員にもたらし

たもので、信憑性を疑ったら、こういう騒ぎは起きなかった。この問題で国会が大騒ぎになって、貴重な国会審議時間と多額の経費が無駄に使われた。

8、思うこと

この事件はつい最近のことであるが、全く教訓になっていないようである。

最近の報道で特に感ずるのは、方針や評価といったことでなく、政治や社会で本質的に事態を変えるものでない言葉の表現について、しかも根拠がはつきりしないあいまいなことなどでなぜ大騒ぎするのであろうか。根も葉もないことを煽るといふことしか考えられない。

原発事故についてドイツがひどい報道をして、救援チームが何もしないですぐ帰国したり、ドイツ

滞在の日本人がひどく心配したそうである。発信者はともかく、それに乗っかって大騒ぎするのは、情報源の責任がかららないため、おおっぴらにやれるのだろうか。しかしそれが事態を大きく深刻化させる。

また発言の途中の一部の言葉が抜かれて、報道作成者の意図に利用されることもある。平野震災復興相の「私の同級生のように逃げなかつたバカがいる」とした発言も、大切な友人を失った悔しさから出たものと思われ、前後を考えれば理解できる。

幸い、インターネットなどの情報化が進んでいろいろな情報が入ってくる。多面的に情報を得るとともに、これらの信憑性も考えて行動すべきなのであろう。

無駄なことで大騒ぎして、難しい国政の問題が次々に先送りされ、問題はより大きくなり、数も積み上がっていく。どこで止めることができるのだろうか。